

内膳堀について

1603年(慶長8年)徳川家康が征夷大將軍となり徳川幕府が成立し長い戦国の世に終止符が打たれました。ここから近世と呼ばれる江戸時代が始まりますが、1615年の大阪夏の陣で豊臣家が滅亡し、1638年の島原の乱平定まで戦国の余燼が続きます。

私たち香貫の里に住む者にとって決して忘れることの出来ない郷土の恩人、植田内膳が活躍した時代はまだ戦国の世の余燼の残る徳川幕府初期、三代将軍徳川家光の時代、寛永年間でした。

植田内膳の業績は現在「内膳堀」と呼ばれる灌漑用水施設の建設による新田開発です。

第一次産業と呼ばれるようにこの間まで日本の産業の中心は、お米の生産でした。稲作の増産には農業技術の発展や品種改良などの方法がありますが、耕地面積の拡大は最も確実なやり方です。稲作に適した田畑の開発とはつまるところ用水の確保です。日本の新田開発はいつの時代でも一貫して営々と続けられてきましたが、開発ラッシュともいえるピークが三度あります。第一回目の新田開発ブームが奈良時代、全国に条里制が敷かれた天平の世です。次が戦国時代から江戸時代初期までの時代で、新田開発のピークを迎えます。最後が明治三十年代です。

特に戦国から徳川幕府初頭の新田開発は、戦国大名の富国政策、幕藩体制化の領主の領国経営の重要な施策として大々的に奨励されました。新田開発は灌漑用水施設の建設のために高度な土木技術が要求されますが、戦国時代以来のお城や砦を作る築城技術の発展や、鉱山開発に伴う土木技術の進歩が大いに貢献しました。

新田開発の主体である開発者は、幕府や領主が行う官営開発と、在地の土豪層・農民・町人が行う民営開発に分けられます。

植田内膳の開発は民営開発という事になりますが、残念ながら植田内膳その人について資料的によく分かっておりません。内膳という名前は、律令時代の宮中の食事をつかさどる役職に内膳司(ないぜんし)というのがあり一般の庶民層には使用されないと考えられるため、由緒ある土豪層か土着化した戦国武士の大百姓層の出身かもしれません。

一説には原の植田新田を拓いた植田三十郎が後に上香貫の新田(今の吉田町)に居住したという説があり、近くに三十郎新田という小字名も残っていますのでこの植田三十郎が内膳本人か一族である可能性があります。

いずれにしろ灌漑用水施設の土木事業には莫大な労力と資本を必要とします。新田開発事業は幕府の許可が要りますが、詳細な工事計画、

設計図、資金等についての事業計画の書類が幕府に提出され事業の成否が審査されます。

「内膳堀」が完成してからおよそ三十年後に掘削された有名な箱根用水(深良用水)の工事は、江戸浅草の商人友野与右エ門等の町人請負による新田開発事業ですが、打ち続く難工事に豊富な資金を誇る江戸商人も音を上げるほどだったと伝えられています。

植田内膳の資金はどうなっていたのでしょうか。深良用水のように江戸商人が資本に参加していたのでしょうか。そのあたりのこともよく分かっておりません。ただ、この工事によって植田内膳が家産を傾け、生命の危機に瀕するほど困窮したと伝えられ、「内膳堀」を後世「泣き堀」と称したと伝えられていることから資金繰りの苦しさしのべられます。

さて「内膳堀」が完成する以前の香貫一帯の用水は、香貫山の水をため池に溜めわずかに用水として使用するという状態で、慢性的な水不足に陥っておりました。当然田畑として利用できる耕地も限られ、水論(みずろん)といわれる水争いも絶えなかったことと思われます。すぐ傍を満々と水をたたえて流れている狩野川が流れているというのに、香貫の里は常に渇水状態だったわけです。

植田内膳はこの狩野川の水を利用することにしたのです。狩野川の水

を取水するためには狩野川の水位を上げなければなりません。内膳は今の通称大滝と呼ばれる土手に石を積み堰を構築して水位を上げることを企図しました。石を三日月形に築き流水の水位を上げる方法です。大雨や満水(まんすい)と呼ばれる洪水に耐えられる堰を構築する困難さは想像を絶するものがありました。(5年の歳月をかけて寛永9年、香貫山麓をめぐる用水路は完成しました。)? 出典は?

無謀とも言えるこの難工事を当時の香貫の人々はどのように見ていたでしょうか。賽の河原の石積に似て積んでは流され流されては積むという工事が何年も続いたことでしょう。苦心惨憺の末、堰はついに完成し一条の水が取水口から香貫の里に流れ出したときの喜びはいかばかりだったかと思われます。

沼津市歴史民族資料館に所蔵されている文政11年(1837年)に書かれた駿州駿河之郡上香貫村絵図に内膳堀がきれいに描かれています。これを見ると水門が取り付けられ、東西二本の内膳堀が掘削され香貫の里を流れていることが分かります。この内膳堀によって新田開発が大いに進み、既存の田畑の水不足も解消され、水争いもすっかり姿を消したものだと思われます。

香貫一帯は、少ない耕地でしかも水不足という困窮した村から一躍豊

な村に発展しました。「内膳堀」が香貫の里の人々子々孫々にもたらした恵みは計り知れないものがあります。今ふうには経済効果をお金に換算したなら莫大なものになることでしょう。このことは忘れてはならないことです。植田内膳に対し私たちは永遠に顕彰し続けなければ忘恩の徒となります。

1636年寛永13年1月16日植田内膳は香貫の地で亡くなり、この霊山寺に埋葬されました。昭和3年（1928）11月、内膳の偉業を顕彰するため香貫山の香陵台に頌徳碑が建立されましたが、題字は徳富蘇峰の揮毫、碑陰記の撰ならびに書は池谷観海によるものです。また、かつての堀の取入口には取入口碑（中瀬町）が建てられています。

「治生産業もとより布施にあらざるはなし」と経典にありますが、植田内膳の灌漑用水施設「内膳堀」工事は私たちに対する大いなる布施行であります。毎年霊山寺で植田内膳の関係者や香貫用水委員会、JA職員によって供養祭が営まれておりますが、今後とも一層植田内膳の偉大な功績について語り伝え子々孫々感謝してまいりたいと思います。